2011年10月17日 中日新聞 朝刊 32頁

「タカダイ」理解できず

周囲の誘導が頼り

「高台に避難してください」。被災地で防災無線が呼び掛けたその言葉を、理解できない外国人は多かった。東日本大震災で死亡した外国人は三十二人。言葉が理解できたかどうか、そして彼らを助けようとする日本人が身近にいたかどうかが、生死を分ける要因となった。（後藤孝好）

「ビナンって何？　タカダイって分からないよ。日本に来て九年になる宮城県南三陸町のフィリピン人、熊谷サリーさん(三)が震災当日を振り返る。

激しい揺れが襲ったのは、海岸に近い作業場でエリンギのパック詰めを終え、昼食を取った直後だった。防災無線が何かを叫び始めたが、聞き取れない。漁師の夫は港にいる。「怖くてどうしたらいいか分からなかった」。

とにかく二人の娘を守ろうと、二キロ離れた保育園へ車で急いだ。娘たちと合流できたが、どこへ逃げればいいのか。その場にとどまっていると、園の職員から「裏山へ逃げて」と言われ、娘二人の手を握り締めた。山道を歩いた直後、目の前で保育園に津波が押し寄せた。

エリンギの作業場もごっそり流され、直前まで一緒にいた社長はどこへ行くのか。「この世の終わり。イエス・キリストが降臨する」と思った」

その日はたまたま夫が車で出かけていたが、車内のテレビで「津波が来る。避難を」と聞き、高台にある夫の実家へ行き先を変えた。

自宅は津波に流されたため、車で高台へ逃れた。作業場と自宅は跡形もなくなった。

地元でフィリピン人のまとめ役をするアメリアさんは「タカダイにビナン」と言われたら一人では逃げられなかったよ」

日本暮らしが三十年を超える小中学校講師、佐々木アメリアさん(五)は日本語が理解できて一命をとりとめた。

地震後、宮城県気仙沼市から南三陸町の自宅に車で向かったが、車内のテレビで「津波が来る。避難を」と聞き、高台にある夫の実家へ行き先を変えた。

その日はたまたま夫の孝司さん(五)もいた。作業場と自宅は跡形もなくなった。

地元でフィリピン人のまとめ役をするアメリアさんは「タカダイにビナン」と言われても、右の耳から左の耳に通り抜けるだけ。「高い所に逃げて」なら、理解できる人が多

にいた社長はどこへ行くのか。「この世の終わり。イエス・キリストが降臨する」と思った」

同じくフィリピン人の斎藤ジュリエットさん(四)は町内の漁港近くでワカメの選別作業中、地震に遭い、気が動転した。「何分もすごく揺れた。「この世の終わり。イエス・キリストが降臨する」と思った」

地震後、宮城県気仙沼市から南三陸町の自宅に車で向かったが、車内のテレビで「津波が来る。避難を」と聞き、高台にある夫の実家へ行き先を変えた。

その日はたまたま夫の孝司さん(五)もいた。作業場と自宅は跡形もなくなった。

地元でフィリピン人のまとめ役をするアメリアさんは「タカダイにビナン」と言われても、右の耳から左の耳に通り抜けるだけ。「高い所に逃げて」なら、理解できる人が多

来日して二年。宮城県石巻市のスナックで働いており、地元の付き合いは少なく、日本語も日常会話ができる程度だった。

「メイちゃんは、逃げる場所も分からなかったと思う。携帯電話もつながらず、連絡が取れなかった。アメリアさんは同胞の死を悔やむ。

一方、勤務先の会社の誘導で助かった外国人もいる。

宮城県女川町の女川港近くにある佐藤水産では、佐藤充専務(五)が中国人実習生二十人を裏山の神社へ誘導した。全員が避難したが

確かめるため会社へ戻り、津波にのまれて帰った。「勤務中でなかったら、犠牲者が出ていたでしょう」。外国人の生死は、周囲の日本人の意識と行動によることを表している。

内閣府は外国人を高齢者や障害者、乳幼児とともに「災害時要援護者」と位置付け、各自治体に避難支援の取り組みを求めている。中部地方の自治体もそれぞれ計画を練っているが、対策が浸透しない課題もある。

中部六県と名古屋市に取材すると、外国語の防災ガイドの作成、避難ルートの標識の多言語化、ホームページ（HP）で外国語の防災情報を掲載するなどの対策が多い。

分かりやすい日本語で避難情報の発信を検討するのは長野県。例えば、余震を「後から来る地震」、避難所を「みんなが逃げるところ」と置き換え、防災無線やHPで呼びかけ

人材育成、訓練 対策 道半ば

る考えだ。

三重県は、外国人向け防災セミナー開催のほか、避難所生活の決まりごとを外国語とイラストで示した「外国人支援キット」を作成している。岐阜県は災害時には外国人向けのミニFM局も開設する計画だ。

外国人を助ける人材を育成しようと、福井県は二〇〇九年度から

年一回、災害時通訳ボランティア養成講座を開催。新潟県中越沖地震の体験者から災害時に使う外国語を学び、今年は東日本大震災で学ぶ。ボランティアが外国人を助けた実例を学ぶ。

ただ、外国人の避難対策全体が進んでいるとは言い難い。

愛知県は「市町村に災害時要援護者の避難計画をつくるよう呼び

掛けているが、高齢者や障害者が中心」と実情を説明。内閣府は、外国人も防災訓練に参加するよう各自治体に呼びかけているが、「外国人は独自のコミュニティーをつくり、地域に溶け込めない面もあり、訓練への参加が十分とは言えない」（名古屋市）という。

滋賀県は〇八年度から「災害時外国人サポーター養成講座」を開催。二日間かけて外国人支援センターの設立や避難所巡回の準備などをグループワークで学ぶ試みだ。これまで二百二十人が受講したが、実際に「災害時に活動する」と登録したのは約四十人と低迷。人材育成の難しさを物語っている。

「ビナンって何？　タカダイって分からないよ。日本に来て九年になる宮城県南三陸町のフィリピン人、熊谷サリーさん(三)が震災当日を振り返る。

激しい揺れが襲ったのは、海岸に近い作業場でエリンギのパック詰めを終え、昼食を取った直後だった。防災無線が何かを叫び始めたが、聞き取れない。漁師の夫は港にいる。「怖くてどうしたらいいか分からなかった」。

とにかく二人の娘を守ろうと、二キロ離れた保育園へ車で急いだ。娘たちと合流できたが、どこへ逃げればいいのか。その場にとどまっていると、園の職員から「裏山へ逃げて」と言われ、娘二人の手を握り締めた。山道を歩いた直後、目の前で保育園に津波が押し寄せた。

エリンギの作業場もごっそり流され、直前まで一緒にいた社長はどこへ行くのか。「この世の終わり。イエス・キリストが降臨する」と思った」

その日はたまたま夫が車で出かけていたが、車内のテレビで「津波が来る。避難を」と聞き、高台にある夫の実家へ行き先を変えた。

自宅は津波に流されたため、車で高台へ逃れた。作業場と自宅は跡形もなくなった。

地元でフィリピン人のまとめ役をするアメリアさんは「タカダイにビナン」と言われても、右の耳から左の耳に通り抜けるだけ。「高い所に逃げて」なら、理解できる人が多

自宅が津波で流され、何もなくなった場所に立ち尽くす佐々木アメリアさん＝宮城県南三陸町で

「高台に避難してください」。被災地で防災無線が呼び掛けたその言葉を、理解できない外国人は多かった。東日本大震災で死亡した外国人は三十二人。言葉が理解できたかどうか、そして彼らを助けようとする日本人が身近にいたかどうかが、生死を分ける要因となった。（後藤孝好）

「ビナンって何？　タカダイって分からないよ。日本に来て九年になる宮城県南三陸町のフィリピン人、熊谷サリーさん(三)が震災当日を振り返る。

激しい揺れが襲ったのは、海岸に近い作業場でエリンギのパック詰めを終え、昼食を取った直後だった。防災無線が何かを叫び始めたが、聞き取れない。漁師の夫は港にいる。「怖くてどうしたらいいか分からなかった」。

とにかく二人の娘を守ろうと、二キロ離れた保育園へ車で急いだ。娘たちと合流できたが、どこへ逃げればいいのか。その場にとどまっていると、園の職員から「裏山へ逃げて」と言われ、娘二人の手を握り締めた。山道を歩いた直後、目の前で保育園に津波が押し寄せた。

エリンギの作業場もごっそり流され、直前まで一緒にいた社長はどこへ行くのか。「この世の終わり。イエス・キリストが降臨する」と思った」

その日はたまたま夫が車で出かけていたが、車内のテレビで「津波が来る。避難を」と聞き、高台にある夫の実家へ行き先を変えた。

自宅は津波に流されたため、車で高台へ逃れた。作業場と自宅は跡形もなくなった。

地元でフィリピン人のまとめ役をするアメリアさんは「タカダイにビナン」と言われても、右の耳から左の耳に通り抜けるだけ。「高い所に逃げて」なら、理解できる人が多

次回は、燃料不足について考えます。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年10月17日 中日新聞 朝刊 32頁

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年10月17日 中日新聞 朝刊 32頁

避難住民の声 教訓に

10月中旬の昼下がり、福島県会津若松市の仮設住宅にある集会所を熱弁が飛び交った。「やっぱり原発は危険だった。今回の事故で身に染みて分かった」「そちらも廃炉にした方がいい」

集まった住民たちの声に耳を傾け時にペンを走らすのは、静岡や新潟など全国各地の原発立地自治体の関係者たち。原発事故で故郷を追われた福島県大熊町民に直接話を聞こうと、仮設住宅まで足を運んだのだ。

塙さん一家からは、仕事の光一さんに代わり、幸さんが出席した。

「うちの町は除染して住民を帰還させる方針を持っていると聞くが、重要な判断は住民の生の声をもっと聞いてほしい」。9月の一時帰宅で、町へ戻って住むのは無理だと判断した経験から、現状の不満を率直に発言した。「あれほど高線量だった町が、除染した程度で住めるとは思えない」

「考えさせられました」「勉強不足でした」。幸さんら大熊町民の切実な訴えに、立地自治体の関係者は表情を引き締めて帰って行った。

多くの住民が参加できなかった平日の防災訓練、大渋滞した避難の道、そして疑うことさえしなかった原発の存在…。いま思い返せば反省点はたくさんある。「目の前の生活に追われてますが、全国にもっと教訓が伝わってほしい」

集会場に集まった仲間の町民を見て、幸さんは少しだけ心が軽くなった。

いつの日か 原発1キロからの避難 —19—

塙（はなわ）さん一家 原発事故で大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らし、会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生活。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています